



きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの第2回目です。どうぞ、味わってください。

2 コロの葬式

通りすがりの犬の散歩をみてよみがえってきた遠い彼方の思い出。…子供たちのアイドル、犬のコロの思い出。

出張から帰ってきた日、別府にいるシスターから「あんたんちの子が、『ベビー・ベッドをくれ』と言って、それを持って帰った」という電話があった。

はて、何だろう？ よりにもよって園で最高の悪んぼう、大人たちから敬遠されているグループの子たちだった。

そのベッドは園長室におかれることとなった。伝染病に罹り、獣医から死の宣告を受けた犬のコロを交代で看病するためである。

弱々しい目をあけて、力なく尾を振るコロちゃん。私の涙をさそった。

ふと、ベッドにかけてあるプラカードが目にとまる。「コロちゃん、生きて、コロが片わになっても、うちらがみるけん！生きてコロ。」へたな字でかかっていた。

大人から疎（うと）まれているこの子どもたちの真の心を見て感動した。

そのそばにルルドの水がおいてあり、しきりにその水をなめさせていた。「この水はフランスのルルドという所で、聖母のご出現があり、そこに泉が湧（わ）き、この水によって難病がいやされる不思議な水」。

この子供たちにとって、コロは女子グループの最高のものであった。私もコロを通してこのグループの一人となった。

死にそうなコロを残して、出張しなければならなかった。辛かった。

出張先にデンワがありコロの死が知らされた。電話口で泣いている彼女たち…。私は静かに電話をおいた。

コロの葬式。修道院直属の神父様の所へ行って葬式してほしいと願うと、彼は驚いた。生粋のイタリア人で、子供たちの心を汲み、聖堂入口でならばと。彼はコロを聖水で祝福し、園の子供たちと一緒に葬りの場に参加した。日頃歌わない聖歌をうたってコロは葬られた。

帰院した私に、当時の園長は言った。「わしが出張する時も、送ってもくれないこの子たち、コロのためになあ…。子供の真の心を理解したらしい。しつけ、きまりだけでは子供の心は育たない。

コロちゃんの墓に、野の花が小さいびんに生けてあった（シスターK.M.）。